

編集後記：辞書の収集に凝っている。三浦しをんさんの「舟を編む」の影響だ。一般に辞書はどれも同じ様なものと思われがちだが、編纂者の思いが強く表れていて、辞書ごとにより記述が違う。比べてみると実に面白い。

先日、ふと思い立って、“合理化”という語句を調べてみた。

①〔自分の行動を〕もっともらしく理由をつけること。②むだをはぶくこと。③人員整理。首切り。『三省堂国語辞典第七版（三省堂）』

①〔自分の行動を〕もっともらしく理由をつけること。②新技術の導入や適正な人員配置などによって作業効率を向上させ、また、経費の削減を図ること。『新明解国語辞典第七版（三省堂）』

①理由をつけて、自分が正しいとすること。②むだを省いて能率をよくすること。『学研現代新国語辞典改訂第五版（学研）』

手元にある辞書が3冊とも、「無駄を省くこと」よりも、「理由を付けて自分を正当化すること」が上位に書かれていることに驚いた。それにしても「首切り」はあまりにも直接的……。

5年ほど前、筆者が担当した本欄でNHK ラジオ第二放送の気象通報の回数が1日3回から1回になったことを取り上げたが、その少し後に音声合成による自動放送となった。音声合成化の開発を担当された“中の人”と仕事上お付き合いがあったが、自然な音声にするためにとてもご苦労されたそうだ。自動音声と知らなければ、ほとんどの人が肉声と勘違いすると思われるほど自然に聞こえる。“無駄を省く”方の「合理化」の良い例と言えるだろうか。一部のマニア

は、アナウンサーによる読み方の違いを楽しんでいたようで、残念に感じている人もいるのだろうか……。

この2月に関東甲信の地方気象台による地上気象観測の目視観測が自動化され、雲や一部を除いた大気現象の観測の報告がなくなった。これに伴い気象通報で、前橋と銚子では、快晴や霧雨、あられなど一部の天気は報じられることが無くなった。測候精神という言葉とともに業務を行ってきた諸先輩方に対し、申し訳なく思う現役職員も少なくないと思われる。しかし、他の手法による観測技術向上に伴う目視観測の重要度の“相対的”な低下や、地域の防災活動を支援するための要員確保など、様々な判断があった上での“もう一つの意味”も含む止むを得ない「合理化」だったと言えよのだろうか。

本誌においても、編集会議資料のペーパーレス化、Web会議の導入など“無駄を省く”方の「合理化」を図りつつ、学会員のみなさまにより有用な情報を提供できるよう努めているところである。

さて、話題は大きく変わり蛇足感満載だが、本欄でも何度か紹介した長男について報告させて欲しい。気象少年養成ギブスコーナーである。最年少で気象予報士にする夢はあえなく消え失せたが、その代わり昨春から気象庁の“見習い生”になった。数学、物理などの科目は、高校までの勉強の様にうまく「合理化」できず苦しんでいるようだが、得意な情報処理系の科目は学年の中で頼りにされることもあるらしい。これからのAI時代、少しは社会の役に立ってくれるに違いない、と親バカながら期待している。

(金田昌樹)